

バントゥ諸語の参照文法書

バントゥ諸語研究における参照文法書の位置づけ

米田 信子

Reference Grammar of Bantu Languages

The Role of Reference Grammars in the Study of Bantu Languages

YONEDA, Nobuko

Keywords: Bantu languages, reference grammar, missionaries, linguists, microvariation

キーワード: バントゥ諸語, 参照文法書, 宣教師, 言語学者, マイクロバリエーション

1. はじめに：バントゥ諸語概要
2. バントゥ諸語研究の変遷と参照文法書
3. 日本のバントゥ諸語研究と参照文法書
4. バントゥ諸語の参照文法書の可能性
5. おわりに

1. はじめに：バントゥ諸語概要

本稿では、バントゥ諸語研究の変遷とそのなかでの参照文法書の位置づけ、また日本におけるバントゥ諸語研究と参照文法書の動向を報告し、参照文法書の重要性と今後の展開の可能性について述べる。

バントゥ諸語は、アフリカ4大語族のひとつであるニジェール・コンゴ語族に属する言語群である。西アフリカに位置するカメルーンと東アフリカに位置するケニアを結ぶライン以南の全域に広く分布しており、その数は500–600言語（小森・米田2014）と言われている。

バントゥ諸語は慣例的にA83, N13, JD531のようにローマ字と2桁あるいは3桁の数字を用いて分類される。これはGuthrie (1967–71)が始めた分類で、バントゥ諸語が話されている地域を15のゾーンに分けてローマ字をあて、各ゾーン内の言語が10番台、20番台といった語群にまとめられている。Guthrie以降少しずつ修正が加えられ、現在では図1のような17のゾーンに分けられるのが一般的である。

バントゥ諸語は、(i) 名詞クラスとそれを基盤にした文法呼応システム、(ii) 膠着性の高い動詞



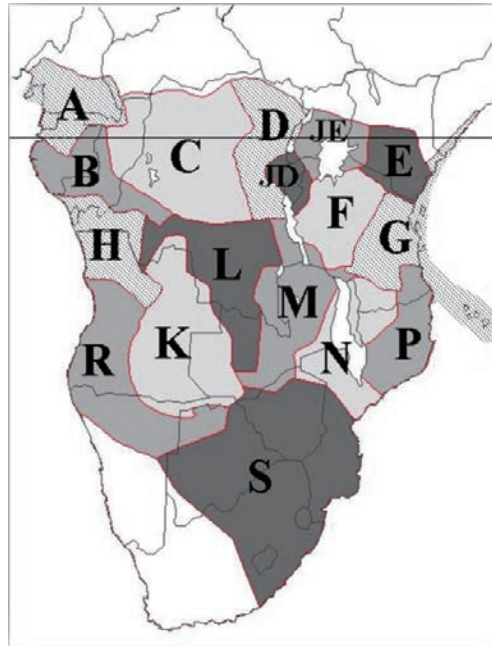


図1 バントゥ諸語のゾーン区分 (米田他 2012: 151)

構造，という特徴を共有しており，広域に分布しているにも拘らず類似性が高いことで知られている。比較研究のために，名詞クラスには Meeussen (1967: 97) が再建したバントゥ祖語の名詞クラスを基にした共通のクラス番号が付けられている。再建されたバントゥ祖語の名詞クラスと各名詞クラスの接頭辞および呼応接辞を表 1 に示す。最も多くの名詞クラスを有している言語のひとつであるガンダ語 [JE15] の例と合わせて挙げる。

このような分類や共通のクラス番号が存在していることからわかるように，バントゥ諸語には広く共有されている研究基盤がある。アフリカ諸語のなかでは最も多くの研究がなされている語群であり，現在では隔年で開催される「国際バントゥ諸語学会 (International Conference on Bantu Languages)」という語群の名前を冠する国際学会を有するまでになっている。

しかしながら，「参照文法書」と呼べるものが存在する言語は全体の 10% 程度にすぎない。文法スケッチや語彙集が存在する言語や部分的に調査や分析が行われた言語を加えても，全体の半分にも遠くおよばないという状況である。

2. バントゥ諸語研究の変遷と参照文法書

バントゥ諸語研究の始まりは植民地時代である。この節では，植民地時代とそれ以降とに分けてバントゥ諸語研究の変遷をまとめる。

表1 名詞クラスと名詞クラス接頭辞・主語接辞・目的語接辞（米田他 2012: 153）

		バントゥ祖語		ガンダ語		
人称		主語接辞	目的語接辞		主語接辞	目的語接辞
1SG		*n-	*n-		N-	N-
2SG		*u-	*ku-		o-	ku-
1PL		*tu-	*tu-		tu-	tu-
2PL		*mu-	*mu-		mu-	mu-
名詞クラス	名詞クラス接頭辞	主語接辞	目的語接辞	名詞クラス接頭辞	主語接辞	目的語接辞
1	*mu-	*u-, *a-	*mu-	(o)mu-	a-	mu-
2	*ba-	*ba-	*ba-	(a)ba-	ba-	ba-
3	*mu-	*gu-	*gu-	(o)mu-	gu-	gu-
4	*mi-	*gi-	*gi-	(e)mi-	gi-	gi-
5	*i-	*dj-	*dj-	(e)ri-	li-	li-
6	*ma-	*ga-	*ga-	(a)ma-	ga-	ga-
7	*ki-	*ki-	*ki-	(e)ki-	ki-	ki-
8	*bj-	*bj-	*bj-	(e)bi-	bi-	bi-
9	*n-	*ji-	*ji-	(e)n-	e-	e-
10	*n-	*jj-	*jj-	(e)n-	zi-	zi-
11	*du-	*du-	*du-	(o)lu-	lu-	lu-
12	*ka-	*ka-	*ka-	(a)ka-	ka-	ka-
13	*tu-	*tu-	*tu-	(o)tu-	tu-	tu-
14	*bu-	*bu-	*bu-	(o)bu-	bu-	bu-
15	*ku-	*ku-	*ku-	(o)ku-	ku-	ku-
16	*pa-	*pa-	*pa-	wa-	wa-	wa-
17	*ku-	*ku-	*ku-	ku-	ku-	ku-
18	*mu-	*mu-	*mu-	mu-	mu-	mu-
19	*pj-	*pj-	*pj-			
20				(o)gu-	gu-	gu-
21						
22				(a)ga-	ga-	ga-
23				e-	e-	e-
24	(*i-)	?	?			

2.1. 植民地時代

植民地時代のバントゥ諸語研究は、宣教師による記述研究と言語学者による比較研究、というまとめ方ができる。

2.1.1. 宣教師による研究

バントゥ諸語の研究は、19世紀末の植民地時代に宣教師たちによって始められた。キリスト教の宣教が始まった時期でもある。宣教師たちが赴任地やその周辺で話されている言語の語彙収集や文法調査を行ったのが始まりである。これらは現地語での布教と聖書翻訳のためのものであったが、「未知の言語」の全体像を理解することをめざしていた点で、参照文法書と目的を共有するものである。

20世紀前半には、宣教師による語彙集や文法書がいくつも出版されている。言語学の訓練を特別に受けているわけではない宣教師たちによる言語の記述には、当然ながら質的にばらつきが見られる。明らかに間違っている分析や聞き取れていないところ、また宣教師自身の母語に影響されていると思われるところなども少なくない。しかしながら、文献資料が絶対的に不足しているアフリカ諸語の研究にとって当時の文法スケッチや語彙集は貴重な言語資料である。

宣教師のなかには優れた言語学の知識を有する者もいた。最も有名なのは Clement Doke と E. O. Ashton である。南部アフリカで宣教活動をしていた Doke は、弟子たちと共に、ランバ語 [M54] (Doke 1922, 1937), ズールー語 [S42] (Doke 1927), ショナ語 [S10] (Fortune 1955), 南ソト語 [S33] (Doke and Mofokeng 1957) など多くの南部バントゥ諸語の文法書を書いている。Ashton が宣教活動を行っていたのは東アフリカで、彼女はスワヒリ語 (Ashton 1947) とガンダ語 (Ashton et al. 1954) の参照文法書を書いている。いずれの参照文法書も、これらの言語の研究には現在でも必ず引用される言語学的価値の高い参照文法書である。Doke や Ashton はのちに言語学の教鞭をとることになったほど言語学に長けていたが、彼ら以外にも言語学の知識を有する宣教師は少なくなかったようである。

このような例があるため宣教師と言語学者を明確に区別することが難しい場合もあるが、この時代に書かれた語彙集や文法書の多くが宣教師たちによるものであることはまちがいないだろう。この時期に書かれた参照文法書の例として、東部バントゥ諸語 (図1の D, E, F, G, JD, JE, M, N, P) の参照文法書を挙げる (小森・米田 1998)。

- [D28] ホロホロ語 (Coupez 1955)
- [E51] ギクユ語 (McGregor 1905, Le Bernhard 1908)
- [E55] カンバ語 (Last 1885, Farnswaorth 1954)
- [E71] ポコモ語 (Krafft 1904)
- [F21] スクマ語 (Koenen n.d.)
- [F22] ニャムエジ語 (Jonson 1949)
- [F23] スンブツ語 (Capus 1898)
- [G11] ゴゴ語 (Cordell 1898)
- [G12] カグル語 (Last 1886)
- [G23] シャンバラ語 (Rösler 1912)
- [G42] スワヒリ語 (Ashton 1947)

- [G65] キンガ語 (Wolff 1905)
- [JE11] ニョロ語 (Maddox 1938)
- [JE13] ンコレ-ギガ語 (Taylor 1985)
- [JE15] ガンダ語 (Ashton et al. 1954)
- [JE22] ハヤ語 (Betbeder 1936)
- [JE24] ケレウェ語 (Hurel, 1909)
- [JE251] クッヤ語 (Sillery 1936)
- [JE32] ルヒヤ語 (Appleby 1961), マサバ語 (Purvis 1907), ブクス語 (Huntingford 1924)
- [JE41] ロゴオリ語 (Rees 1915)
- [JE42] グシイ語 (Beavon 1921–30)
- [M25] サファ語 (Voorhoeve, n.d.)
- [N12] ンゴニ語 (Ebner, 1951)
- [N13] マテング語 (Ebner 1957)
- [N31] チェワ語 (Watkins 1937)
- [P21] ヤオ語 (Hetherwich 1902, Sandeson 1922, Ebner 1958)
- [P22] ムェラ語 (Harries 1950.)
- [P25] マビハ語 (Harries 1940)
- [P31] マクワ語 (Woodward 1926)

JE は、東アフリカで最初に宣教師たちが布教を始めた地域である。また N12 が話されている地域は、タンザニア南部のキリスト教宣教の拠点となっているところである。これら以外の言語も含め、植民地時代に文法スケッチや参照文法書が書かれた言語の分布とキリスト教の宣教師たちの活動地域は見事に重なっている。

しかしながら、残念なことにこれらの文献がすべて現存しているわけではない。この時代のものはカーボン複写やガリ版印刷のものも多く、それらのうちのかなりがすでに紛失しているようである。例えば [N13] のマテング語の文法スケッチは、ドイツのベネディクトゥス修道会の宣教師によって書かれたもので、タンザニアの修道会宣教本部のアーカイブに保管されていることになっているが、確認したところ現物は見つからなかった。念のためドイツの修道会のアーカイブにも確認したが、そこにも存在しなかった。貴重な資料が紛失してしまっていることは大変遺憾なことである。残っている場合でも、カーボン複写やガリ版印刷のものは劣化が激しく、ページをめくることができないものもある。これらの保存については、デジタル化するなど早急に手を打つ必要がある。

2.1.2. 言語学者による研究

20 世紀の前半には言語学者によるバントゥ諸語研究が本格化してきた。主に、英国、ドイツ、ベルギーなど植民地の宗主国出身の言語学者たちによる研究である。「マインホフの法則」と呼ばれる音韻規則 (Meinhof 1913)、ガズリーのバントゥ諸語分類 (Guthrie 1967–71)、バントゥ祖語の再建 (Meeussen 1967) など、現在に続くバントゥ諸語研究の基盤となっている研究がこの時期に出てきた。

当時の言語学者たちの興味は、個別言語よりもバントゥ諸語全体に向けられていた。したがって、この時代の研究の中心は、Meeussen (1959) によるルンディ語 [JD62] の記述研究などの例外もある

が、個別言語の記述ではなくバントゥ諸語の比較である。何をもち「バントゥ諸語」とみなすかというバントゥ諸語の基準や共通する特徴の分析、分類や系統の分析、バントゥ祖語の再建といった比較言語学の重要な研究がこの時代に生まれている。

2.2. 独立以降

アフリカ諸語の研究は、植民地支配の宗主国という関係からヨーロッパの研究者たちを中心に進められてきたが、独立以降、すなわち 1960 年代以降は、アメリカでもバントゥ諸語の研究が行われるようになった。

植民地時代の研究が現地調査に基づくものであったのに対し、独立以降のアメリカでの研究は、アフリカで調査を行うのではなく、主にアフリカ出身の留学生からデータを収集する形で行われた。またアメリカのバントゥ諸語研究は、特定の理論的枠組みで特定の現象のみを扱うという研究が中心で、対象とする現象を理論的に説明して一般化することに重きが置かれてきた。そのため、その言語の全体像を明らかにすることや記述研究にはあまり関心が向けられてこなかった。20 世紀後半にアメリカで出版された個別言語の参照文法書（に類する）研究としては、Byarushengo et al. (1977) によるハヤ語 [JE22]、Kimenyi (1980) によるルワンダ語 [JD61]、Mchombo (2000) によるチェワ語 [N31] などがあるが、それ以外には個別言語の記述研究はほとんど行われていない。このような傾向、すなわち主にアメリカ国内でデータ収集をする点と記述研究よりも特定の現象の一般化が好まれる点は、現在も変わっていない。

個別言語の記述研究が盛んになってきたのは、「消滅の危機に瀕する言語」に関心が集まり始めた 20 世紀末になってからである。アメリカでのアフリカ諸語の研究はこの時期になっても特定のテーマに絞ったものが中心であったが、ヨーロッパや日本では、20 世紀末以降バントゥ諸語の参照文法書が博士論文として次々に提出されるようになった。また参照文法書までの記述はできなくても、文法スケッチがジャーナルや論文集に投稿されるようになった。2003 年に出版された *The Bantu Languages* (Nurse and Philippson eds. 2003) には、バントゥ諸語の歴史や音韻、形態、テンス・アスペクトといった諸項目と共に、14 言語の文法スケッチが収録された。

かつては言語学者の仕事はバントゥ諸語の比較であり、個別言語の記述をするのは宣教師の仕事であったが、20 世紀が終わろうとする頃になってようやく言語学者（あるいは言語学者を目指す研究者たち）による個別言語の記述研究が活気づいてきた。

この時期の文法スケッチや参照文法書が植民地時代のもものと決定的に異なっているのは、これらが言語学の訓練を受けた研究者たちによって書かれているという点である。特に参照文法書は「博士論文」であり、その質は担保されている（はずである）。20 世紀末から 21 世紀にかけてヨーロッパで博士論文として提出されたものには、カグル語 [G12] (Petzell 2007)、ンデングレコ語 [P11] (Ström 2013)、ンダンバ語 [G52] (Edelsten and Lijongwa 2010)、マ ندا語 [N11] (Bernander 2017) などがある¹。この時期には、日本でも 8 本の参照文法書が博士論文として提出されている（これにつ

¹ これらはいずれもタンザニアの言語である。3.2 で述べる日本の博士論文でも、パツァ語 [S402] (南アフリカ) を除けばすべてタンザニアの言語であり、あきらかにタンザニアに偏っている。タンザニアは言語の数が多いことも確かだが、研究対象言語がこれだけタンザニアに集中しているのは「偶然」ではなく、スワヒリ語の存在が関係していると思われる。スワヒリ語は辞書や教材が揃っているだけでなく、イギリスのロンドン大学、スウェーデンのヨーテボリー大学、オランダのライデン大学、日本の大阪大学などで履修することも可能である。バントゥ諸語の研究者が最初にアクセスする言語は、たいていスワヒリ語である。調査地に入る前に調査媒介言語を習得できることは調査者にとっては大きなメリットである。さらにタンザニアの治安の良さも無関係ではないだろう。

いては 3.2 で述べる) 他, SIL International²のメンバーによる参照文法書が複数出版されている。

「消滅の危機に瀕する言語」に注目が集まるなか, 20 世紀の終盤からはアフリカ諸国の大学でも母語話者によるバントゥ諸語の記述研究が活発になってきた。タンザニアのダルエスサラーム大学ではアフリカ諸語の参照文法書や語彙集を作成するプロジェクト Languages of Tanzania が立ち上がり, 18 言語の語彙集とニャンボ語 [JE21] の参照文法書 (Rugemalira 2005) が出版された。またナミビアでも 1990 年の独立以降, ヘレロ語 [R31], クワニャマ語 [R21], シンダ語 [R22], シンブクシュ語 [R333] などの文法スケッチや参照文法書が続けて出版されている。これらはいずれも母語話者によって (共著の場合は著者のひとりが母語話者) 書かれたものである。

3. 日本のバントゥ諸語研究と参照文法書

2 節では世界のバントゥ諸語研究の歴史を述べてきたが, この節では, 日本のバントゥ諸語研究の変遷を見ていく。バントゥ諸語が最初に日本に紹介されたのは, おそらく新村 (1933) の『言語学概説』である。しかしながら日本で本格的にバントゥ諸語研究が行われるようになったのは, それから 30 年以上も経った後, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (以下 AA 研) が設立された 1964 年である。以下, 現在までの日本のバントゥ諸語研究の流れを 3 つのフェーズに分け, それぞれの時期の特徴を見ていくことにする。

3.1. 第一期：声調

日本におけるバントゥ諸語の言語研究の先駆けとなったのは, 湯川恭敏, 加賀谷良平, 梶茂樹らによる調査・研究である。第一期は, この 3 人によって声調に関する研究が精力的に行われた。

バントゥ諸語の多くが複雑な声調システムを持っているにも拘らず, 欧米の研究者は声調の分析をほとんど行っていなかった。今でこそバントゥ諸語の例文に声調が記された論文が増えてきたが, かつては例文に声調の記号が付けられている論文はほぼ皆無であった。これは宣教師による記述に限ったことではなく, 言語学者による文法記述でも同じである。参照文法書においても, 音韻論の章で声調の説明がなされているものはあっても, それ以外の章の例文には声調が示されていなかった。日本の研究者によるバントゥ諸語の声調に関する一連の研究は, それまでのバントゥ諸語研究を補完するものであり, バントゥ諸語研究において声調の研究が不可欠なものであることを世界に示した。

また, 現地調査で自らデータを収集するという日本のアフリカ諸語研究の基本的スタイルも, この時代にこれらの先駆者たちによって確立された。湯川がアフリカで語彙と基本文法の調査を行ったバントゥ諸語の数は 130 以上にものぼる。のちに湯川は, それら基礎語彙の比較からバントゥ諸語間の遠近関係を判定し, バントゥ諸語の分岐の歴史に関する仮説を提示しているが (湯川 2011), ひとりの研究者によって調査された言語の数としては, 他に類を見ない。

声調というひとつのテーマに絞って多数のバントゥ諸語の調査をしてきた湯川や加賀谷の研究とは対照的に, ひとつの言語に集中して語彙や文法だけでなく文化人類言語学的研究まで含めてその言語全体を研究対象にしたのが, 梶によるテンボ語に関する一連の研究である (梶 1984, 1985 他)。それらの研究の中で梶が最も力を入れてきたのも声調の分析である。まったく異なる

² 聖書の少数民族の言語への翻訳を行うキリスト教系 NGO 団体で, 聖書翻訳を目的に言語研究者による言語調査・研究を行っている。フィールド言語学の訓練を行うコースも開講しており, 言語学者の育成も行っている。

アプローチではあるが、対象言語の全体像を把握することから始めるという点は、3人に共通する研究方針である。一見「声調」という特定の現象に限っているように見える湯川や加賀谷の研究も、声調の調査の前提として、共通の調査票を用いて約2400項目の語彙調査と基本文法調査を必ず行っている。バントゥ諸語において声調は、語彙のレベルで対立があるだけでなく文法機能も担っており、声調の調査にとって文法の理解は不可欠である。

この時期に参照文法書が書かれていないのは意外な気もするが、湯川と加賀谷の編集によってAA研から出版された *Bantu Vocabulary Series* というバントゥ諸語のシリーズ本（全15巻）では、各巻に対象言語の語彙に加えて文法スケッチも収録されている。このシリーズは、現在でも世界中のバントゥ諸語研究において最も頻繁に引用されている文献のひとつである。

3.2. 第二期：参照文法書

バントゥ諸語研究の先駆者たちの教えを受けた世代が活動の中心になったのが、日本のバントゥ諸語研究の第二期である。2.2で述べた20世紀末から今世紀にかけてのヨーロッパと同様、日本でもこの時期の博士課程のバントゥ諸語研究は個別言語の記述研究が中心となった。個別言語の記述研究の成果は参照文法書となり、博士論文として提出されるようになってきた。これが日本におけるバントゥ諸語の参照文法書のスタートである。研究対象になった言語は、マテング語 [N13]（米田2000）、ケレウェ語 [JE24]（小森2003）、マリラ語 [M24]（角谷2004）、バツァ語 [S402]（神谷2006）、ベンデ語 [F12]（阿部2006）、ルツ語 [E61]（品川2008）、マア語 [G221]（安部2016）、スワヒリ語マクンドゥチ方言 [G43c]（古本2018）である。

いずれも、音韻論から形態論、統語論、すなわち小さい単位から大きな単位へという流れで対象言語を網羅的に記述している。扱っている項目はいずれも類似しているが、社会言語学的な記述や文化人類言語学的な記述にどのくらいの分量を割いているか、また章立ての細かさといったあたりにそれぞれの論文（あるいは著者）の個性が出ている。声調の扱いについては、角谷(2004)のように音韻論の章で説明するというのが一般的だと思われるが、米田(2000)は、マテング語の声調の概要を音韻の章で説明した上で、名詞と動詞の声調についてはそれぞれ名詞の章と動詞の章で形態論の一部として扱っている。また、阿部(2006)は「声調論」、品川(2008)は「音調論」という独立した章を立てて、それぞれベンデ語とルツ語の声調を一括して説明をしている。このような違いは見られるが、バントゥ諸語における声調の重要性を説いてきた先駆者たちの教えがこれらの記述研究に活かされていると言えるだろう。2012年には、個別言語の記述研究のエッセンスをまとめた『アフリカ諸語文法要覧』が出版された（塩田編2012）。このなかには9つのバントゥ諸語の文法スケッチが収録されている。

3.3. 第三期：参照文法書からのスタート

現在は、日本のバントゥ諸語研究の第三期と位置付けることができる。第三期にあたる現在の日本のバントゥ諸語研究には、個別テーマの研究と比較・対照研究という2つの流れが見られる。

まず個別テーマの研究である。情報構造、動詞の派生形、関係節、テンス・アスペクト体系といった個別言語の特定の現象に絞った研究が数多く出てくるようになった。その多くは、博士論文を書きながら特に気になった現象であり、言語の全体像を見たからこそ出てきた個別テーマである。

次に比較・対照研究である。バントゥ諸語間の比較研究については、2016年度からAA研の共同研究プロジェクトとして「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型論的研究」が始

まった。4節でも述べるが、このプロジェクトは、国際的な共同研究にも発展している。また日本語をはじめとするバントゥ諸語以外の諸言語との対照研究については、国立国語研究所の共同研究など現在多数進行中である。いずれも共同研究が中心だが、自分が担当する個別言語のデータを責任を持って共同研究に提供することができるのは、その言語の参照文法書を書き、言語の全体像を理解しているからこそである。

このように、個別テーマの研究にしても、比較・対照の共同研究にしても、第三期のバントゥ諸語研究は、参照文法書が土台となり、参照文法書からスタートした研究である。これは日本に限らずバントゥ諸語研究の世界的な動向でもある。

4. バントゥ諸語の参照文法書の可能性

バントゥ諸語の参照文法書は、日本においても世界においても、20世紀末から活性化してきた。さらに現在では、参照文法書を土台とした研究が世界のさまざまなところで展開している。その代表的なものが形態統語論的現象のマイクロバリエーション研究である。

この研究を牽引してきたのが、2014年から始まったロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)を拠点とする国際プロジェクト *Morphosyntactic variation in Bantu: Typology, contact and change* (以下SOAS国際プロジェクト)である。このプロジェクトでは、バントゥ諸語の形態統語論的現象に関する142種類のパラメーターを定め(Guérois et al. 2017)、50以上のバントゥ諸語からデータを収集してデータベースを作成した。このプロジェクトは2018年に終了したが、現在もプロジェクトが作成したデータベースを基にしたマイクロバリエーション研究の成果が次々に発表されている。

また、SOAS国際プロジェクトの海外協力メンバーを中心に、ベルギー、フィンランド、スウェーデン、南アフリカ、タンザニア、日本でもマイクロバリエーション研究のプロジェクトが進められている。3節で述べたAA研の共同研究プロジェクトもそのひとつである。日本のプロジェクトでは、各メンバーが研究対象としている言語のデータを142種類のパラメーターの観点から比較検討してきた。その成果として、2019年には12の言語のデータをまとめたデータ集(Shinagawa & Abe 2019)を出版した。

バントゥ諸語の比較研究は、長年にわたって語彙や音韻を中心に行われてきたが、こうしたミクロなレベルで文法現象の比較研究を行うことで、文法的に類似性が高いと言われてきたバントゥ諸語のなかに見られるバリエーションが少しずつ明らかになっている。

このような比較研究が可能になった理由のひとつとして、比較が可能なところまで個別言語の記述研究が蓄積されてきたことが挙げられる。今世紀に入ってバントゥ諸語の参照文法書の数は確実に増えてきた。個別言語の参照文法書は、今現在も若い研究者たちの博士論文によって積み上げられている。マイクロバリエーション研究は、まさにこのような参照文法書を基盤にした研究であり、SOAS国際プロジェクトの研究は、個別言語の地道な記述研究の重要性を改めて認識させるものになった。

しかしながら、同時に、SOAS国際プロジェクトのマイクロバリエーション研究からは、現在もなおバントゥ諸語の参照文法書がいかに不足しているか、ということも見えてきた。確かに個別言語の記述研究は蓄積されてきたが、それでもSOAS国際プロジェクトでデータを用いることができた言語の数は50強である。これはバントゥ諸語全体から見れば1割程度にすぎない。しかも142のパラメーターの80%以上にデータを提供できた言語は、現在のところ35言語しかない。

142のパラメーターのなかには参照文法書で扱える範囲を超えた、特定の現象について踏み込んだ調査が必要なものも多く含まれている。また近年になって取り上げられるようになった現象に関するもの(例えば情報構造に関するパラメーターなど)もある。そのような現象をこれまでの参照文法書が扱っていないのは仕方がない、というよりもむしろ当然のことでもある。したがって、80%以上の項目にデータを提供できない参照文法書が必ずしも不十分な記述であるというわけではない。

しかしながら、これら142のパラメーターは、最新のものも含めてこれまでのバントゥ諸語研究のなかで取り上げられてきた興味深いバリエーションが見られる現象である。言い換えれば、これらのパラメーターは、少なくとも今後のバントゥ諸語の記述研究では「確認すべき現象」であり、今後は参照文法書に加えられられていくべき項目である。その意味で、SOAS国際プロジェクトのマイクロバリエーション研究は、参照文法書の数だけでなく内容もさらに発展させる必要があることを示唆するものである。

もちろんパラメーターにデータを当てはめることが参照文法書の目的ではないことは言うまでもない。個別言語にはそれぞれ独自の特徴があり、書くべきことは言語によって異なっているだろう。しかしながら、バントゥ諸語の参照文法書で扱われるべき「基本」の部分は共通するはずである。そしておそらくSOAS国際プロジェクトが提案したパラメーターは、今後その「基本」に組み込まれていくものと思われる。先に述べたとおり、バントゥ諸語研究には、分類や名詞クラス番号といった共有されている研究基盤がある。したがってこれらのパラメーターを個別言語の調査において共通の調査項目に発展させていくことは十分に可能だろう。これからバントゥ諸語の調査を行う研究者にとっては、これらのパラメーターを検討することでバントゥ諸語全体の特徴が見えてくるだろうし、それを通してさらに調査すべき現象も見えてくるだろう。マイクロバリエーション研究によって、参照文法書も、またそれらを用いた研究も、より充実したものになっていくことが期待される。

5. おわりに

本稿では、バントゥ諸語研究の変遷と参照文法書の位置づけを見てきた。バントゥ諸語研究の動向も、また参照文法書の扱われ方も、時代とともに変化してきた。その結果として、現在は参照文法書の蓄積を土台としたマイクロバリエーション研究が主流になっている。この研究は、参照文法書の重要性を再認識させるものであり、同時に、参照文法書のさらなる蓄積の必要性を我々に示している。

バントゥ諸語に限らず、アフリカ諸語の研究者の数は世界的に見ても極めて少ない。全世界の言語の約4分の1がアフリカ大陸の言語であることを考えれば、アフリカ諸語の研究者の数は現在の何十倍もいてしかるべきであるが、研究者の数は圧倒的に不足している。このような状況である限り、アフリカ諸語研究の国際的な研究連携は必須である。幸いにして、バントゥ諸語の研究では国際的な研究ネットワークができていく。今後この研究ネットワークはさらに拡大・強化していくと思われるが、その研究ネットワークにおいて貢献していくためには、個別言語の網羅的な記述研究が必須である。たとえ特定の現象のみのデータが求められる場合であっても、それは同じである。そのデータが適切であることが判断できるのは、その言語の全体像を知っているからに他ならない。

言語の記録の点からも、また言語研究のさらなる展開の点からも、バントゥ諸語研究における

参照文法書の重要性がますます高まっていくことは疑いの余地がないだろう。そして、その質の充実も、さらに問われるようになるものと思われる。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

参考文献

- Appleby, L. L. 1961. *A First Luyia Grammar*. Nairobi: East African Literature Bureau.
- Ashton, E. O. 1947. *Swahili Grammar, Including Intonation*. 2nd edn. Harlow: Longman.
- Ashton, E. O., E. M. K. Kulira, E. G. M. Ndawula, and A. N. Tucker. 1954. *A Luganda Grammar*. London: Longman, Green and Co. Ltd.
- Bernander, Rasmus. 2017. "Grammar and Grammaticalization in Manda - An Analysis of the Wider TAM Domain in a Tanzanian Bantu Language." Ph.D dissertation of University of Gothenburg.
- Betbeder, Paul and John Jones. 1949. *A Handbook of the Haya Language*. Bukoba: White Fathers Printing Press.
- Byarushengo, E. Rugwa, Alessandro Duranti and Larry M. Hyman. 1977. *Haya Grammatical Structure*. (Southern California Occasional Papers in Linguistics 6.) Los Angeles: University of Southern California.
- Capus, A. 1898. "Grammaire de shisumbwa." *Zeitschrift für Afrikanische und Oceanische Sprachen* 4: 1-123.
- Coupez, André. 1955. *Esquisse de la Langue Holoholo*. (Annales de Musée Royal du Congo Belge 8. Sciences de l'Homme. Linguistique 12.) Tervuren: Commission de Linguistique Africaine.
- Doke, C. M. 1922. *The Grammar of the Lamba Language*. London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd.
- . 1927. *Text-Book of Zulu Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- . 1938. *Textbook of Lamba Grammar*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- Doke, C. M. and S. M. Mofokeng. 1957. *Textbook of Southern Sotho Grammar*. London: Longman, Green and Co. Ltd.
- Ebner, E. 1951. *Grammatik der Neu-Ki-Ngoni Sprache*. Mission Magagura Tanzania.
- Edelsten, Peter and Chiku Lijongwa. 2010. *A Grammatical Sketch of Chindamba*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Farnswaorth, E. M. 1954. *A Kamba Grammar*. African Inland Mission.
- Fortune, G. 1955. *An Analytical Grammar of Shona*. London: Longman, Green and Co. Ltd.
- Guérois, Rozenn, Hannah Gibson and Lutz Marten. 2017. *Parameters of Bantu Morphosyntactic Variation: Master List*.
- Guthrie, Malcom. 1967. *The Classification of the Bantu Languages*. London: Dawsons of Pall Mall.
- . 1967-1971. *Comparative Bantu*. I-IV. Farnborough: Gregg International.
- Harries, L. 1940. "An Outline of the Mawiha Grammar." *Bantu Studies* 14: 91-146.
- . 1950. *A Grammar of Mwera*. Johannesburg: Witwatersrand University Press.
- Hetherwich, A. 1902. *A Handbook of the Yao Language*. London: Society for Promoting Christian Knowledge.
- Hurel, Eugène. 1909. "La language Kikerewe." *Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen* 12: 1-113.
- Jonson, Erland. 1949. *Kinyangwezi Grammatik*. Tabora: Swedish Free Mission.
- Kimenyi, A. 1980. *A Relational Grammar of Kinyarwanda*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Maganga, Clement and Thilo C. Schadeberg. 1992. *Kinyamwezi: Grammar, Text, Vocabulary*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.

- Meinhof, Carl. 1906. *Grundzüge einer vergleichenden Grammatik der Bantusprachen*. Berlin: Reimer.
- . 1913. “Dissimilation der Nasalverbindungen im Bantu.” *Zeitschrift für kolonialsprachen* 3: 272–278.
- Meeussen, A. E. 1959. *Essai de Grammaire Rundi*. Tervuren: Musée Royal de L’Afrique Centrale.
- . 1967. “Bantu Grammatical Reconstruction.” *African Linguistica* 3: 79–121.
- . 1980. *Bantu Lexical Reconstructions*. Tervuren: Musée Royal de L’Afrique Centrale.
- Möhlig, Wilhelm J. G. and J. U. Kavari. 2008. *Reference Grammar of Herero (Otjiherero)*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Nurse, Derek and Gérard Philippson, eds. 2003. *The Bantu Languages*. London: Routledge.
- Petzell, Malin. 2007. “A Linguistic Description of Kagulu.” Ph.D dissertation of University of Gothenburg.
- Rubongoya, L. T. 1999. *A Modern Runyoro-Rutooro Grammar*. Köln: Rüdiger Köppe Verlag.
- Rugemalira, J. M. 2005. *A Grammatical Sketch of Runyambo*. Dar es Salaam: University of Dar es Salaam.
- Sillery, A. 1936. “A Sketch of the Kikwaya Language.” *Bantu Studies* 6: 273–307.
- Shinagawa, Daisuke and Yuko Abe, eds. 2019. *Descriptive Materials of Morphosyntactic Microvariation in Bantu*. Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
- Ström, Eva-Marie Bloom. 2013. “The Ndengeleko Language of Tanzania.” Ph.D dissertation of University of Gothenburg.
- Taylor, C. 1985. *Nkore-Kiga* (Croom Helm Descriptive Grammars). New Hampshire: Croom Helm.
- Voorhoeve, J. n.d. *A Grammar of Safwa*. Leiden: Afrika Instituut, Universiteit.
- Watkins, Mark Hanna. 1937. *A Grammar of Chichewa*. (Supplement to *Language*, Language Dissertations 24.)
- Woodward, H. W. 1926. “An Outline of Makua Grammar.” *Bantu Studies* 2: 269–325.
- Zimmermann, W. and P. Hasheela. 1998. *Oshikwanyama Grammar*. Windhoek: Gamsberg Macmillan Publishers.
- 安部麻矢 2016 「マア語 (Ma’a/Mbugu) の記述研究—文法と社会言語学的考察」京都大学博士論文。
- 阿部優子 2006 「ベンデ語 (バントウF12, タンザニア) の記述研究」東京外国語大学博士論文。
- 梶茂樹 1984 「テンボ語動詞の形態論的構造」『アジア・アフリカ言語文化研究』28: 1–47.
- 1985 「テンボ語の動詞の活用」『アジア・アフリカ言語文化研究』29: 91–131.
- 角谷征昭 2004 「マリラ語の記述研究」広島大学博士論文。
- 神谷俊郎 2006 「バツァ語の記述研究：その音声・音韻・文法」東京外国語大学博士論文。
- 小森淳子 2003 「ケレウェ語の記述研究—文法・接触による変容・言語文化」京都大学博士論文。
- 小森淳子・米田信子 1998 「東アフリカ言語社会文献目録」『スワヒリ & アフリカ研究』8: 150–192.
- 2014 「総説—言語・言語学」日本アフリカ学会(編)『アフリカ学事典』, 96–107, 京都: 昭和堂。
- 塩田勝彦(編) 2012 『アフリカ諸語文法要覧』広島: 溪水社。
- 品川大輔 2008 「ルツ語 (Bantu, E61) 動詞形態論：記述言語学的研究」名古屋大学博士論文。
- 新村出 1933 『言語学概説』東京: 資文館。
- 古本真 2018 「スワヒリ語マクンドゥッチ方言の文法：名詞と動詞を中心とした記述と分析」京都大学博士論文。
- 湯川恭敏 2011 『バントウ諸語分岐史の研究』東京: ひつじ書房。
- 米田信子 2000 「マテンゴ語の記述研究 (バントウ系, タンザニア) —動詞構造を中心に」東京外国語大学博士論文。
- 米田信子・小森淳子・神谷俊郎 2012 「バントウ諸語概説」塩田勝彦(編)『アフリカ諸語文法要覧』, 151–155, 広島: 溪水社。
- 以下は、2.1 で紹介した文献のうち現物が確認できていないものである。
- Beavon, E. A. 1921–30. “A Gusii Grammar.” (typed only) S. D. A. Mission.
- Cordell, O. T. 1941. *Gogo Grammar*. Londres.
- Ebner, Elzear P. 1957. *Grammatik der kiMatengo-Sprache*. Liparamba.

- Ebner, E. 1958. *Grammatik der Ki-Yao Sprache*. (n.p.)
- Huntingford, G. W. B. 1924. *Grammar of Lubukusu*. (ms).
- Koenen, Rev. M. n.d. *New KiSukuma Grammar*. Mwanza.
- Krafft, H. 1904. *Grammatik der Pokomo-Sprache*. Neukirchen.
- Le Bernhard, R. P. 1908. *Grammaire Gikouyou*. Nairobi Mission Catholique.
- Last, J. T. 1885. *Grammar of the Kamba Language*. London.
- . 1886. *Grammar of the Kaguru Language*. London.
- Maddox, H. E. 1938. *An Elementary Lunyoro Grammar*. London: Society for Promotion Christian Knowledge.
- McGregor, A. Wallace. 1905. *Grammar of the Kikuyu Language*. London.
- Purvis, J. B. 1907. *Lumasaba Grammar*. London.
- Rees, E. J. 1915. *Grammar of Luragoli*. Kiamosi.
- Rösler, O. 1912. "Shambala-grammatik." *Arch. Stud. d Kol* 8: 1–52.
- Sandeson, G. M. 1922. *A Yao Grammar*. (2nd ed.) London.
- Wolff, R. 1905. *Grammatik der Kinga-Sprache*. Berlin: Berlin Mission.